

ニッポンバラタナゴ生息池のアメリカザリガニ防除と植物の復元

大阪経済法科大学 Eco～る 馬場 雄司

1.ニッポンバラタナゴの保全

ニッポンバラタナゴは、コイ科タナゴ亜科に属する淡水魚である。本種は、他のタナゴ類と同様にイシガイ目二枚貝類に産卵するというユニークな生態をもち、本生息地では産卵母貝としてイシガイ、ミナミタガイ、ヌマガイ種群を利用している。本種の保全においては、NPO 法人ニッポンバラタナゴ高安研究会をはじめ、地域住民や地元の大学の協力のもと、保全活動が継続して行われている。

大阪経済法科大学 Eco～るでは、2019年8月から2023年10月現在に至るまでシナイモツゴ郷の会が開発した駆除装置を使用したアメリカザリガニの駆除をニッポンバラタナゴが生息している2池で実施している。本報告では、本種が生息している2池のアメリカザリガニ駆除の結果について報告する。

2.駆除調査を実施した溜池

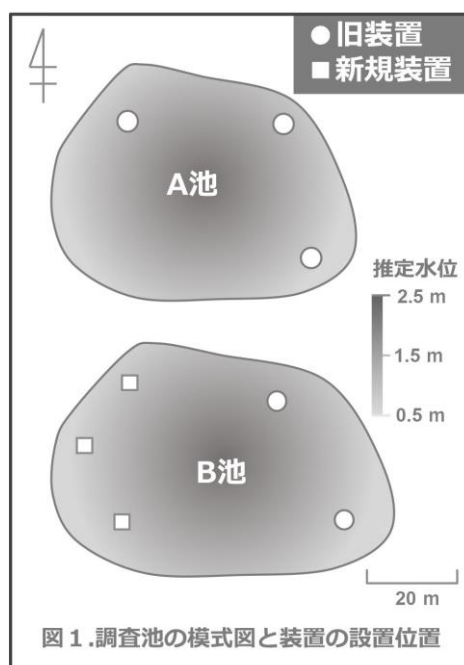
ニッポンバラタナゴ保護の目的から詳細な生息地情報は公開しない。

A池

池の面積約 232m² の谷池で農業に使用されている。駆除装置は、2019年5月から2023年10月現在まで3基設置している。

B池

池の面積約 337m² の谷池で今年度から農業に使用させている。駆除装置は、2019年8月から2023年10月現在まで2基、2022年8月から新規駆除装置を3基設置した。



3.方法

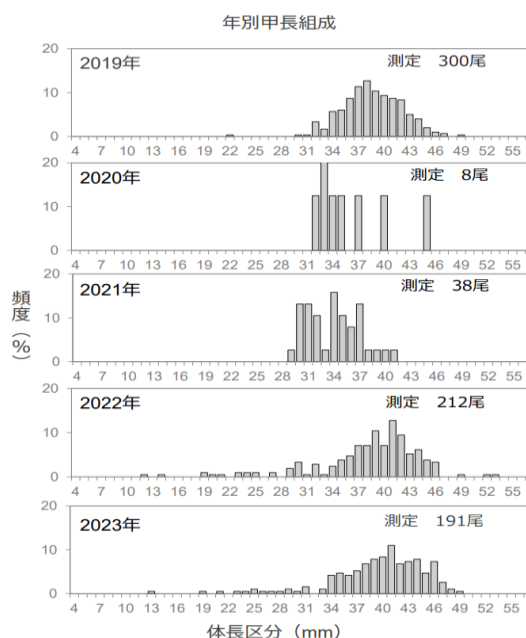
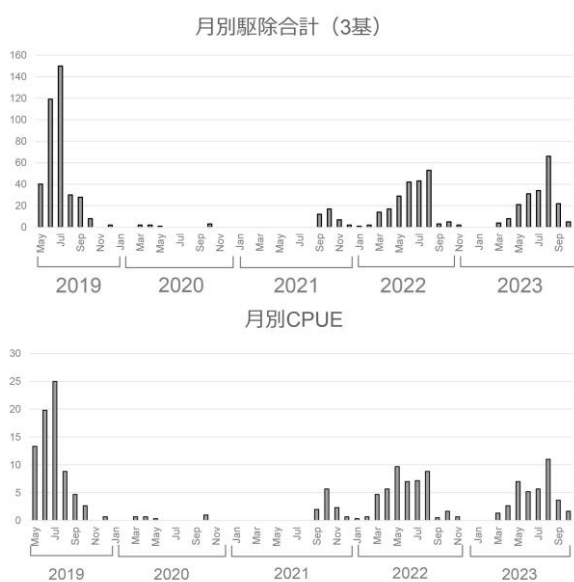
A池・B池とも月1回、6月から9月の間は月に2回、連続捕獲装置を用いた調査を実施した。毎調査時、駆除装置内に入ったアメリカザリガニの頭胸甲長の測定を行った。また、月ごとに駆除装置1基あたりのCPUEと年単位での甲長組成を実施した。

4.アメリカザリガニ駆除結果

A池

アメリカザリガニの駆除数については、2019年5月から2021年の8月までは、低密度で個体数を維持している一方で、2021年9月から2023年10月までは駆除数は増加した。

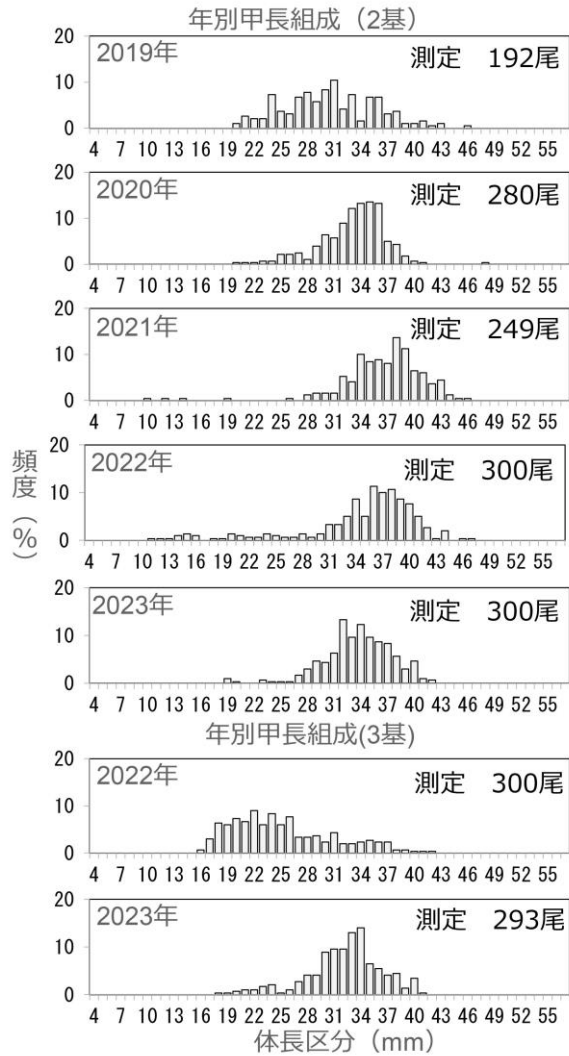
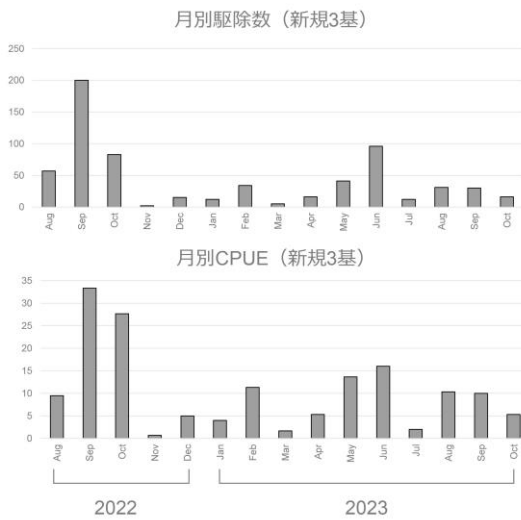
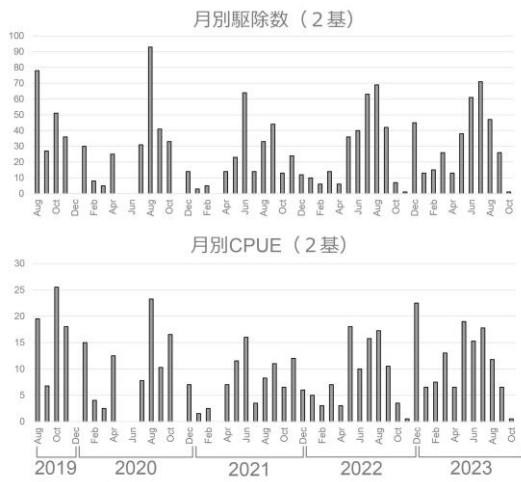
年別甲長組成においては、2019年にほとんど見られなかった幼体が2022年・2023年にかけて高頻度で見られるようになった。また、2019年8月には見られなかったヒシ・エビモ類が2020年5月から2023年10月現在まで継続して確認することができた。



B池

2019年8月から設置している2基においては、駆除数および月別CPUEに変化はみられなかった。年別甲長組成では、2022年に幼体の頻度が他の年に比べて増加した。

2022年8月に設置した3基の駆除装置では、月別駆除数および月別CPUEが減少する結果を示した。年別甲長組成においては2022年にはみられていた幼体の数が2023年には減少した。



5.考察

A池

ヒシ・エビモ類が 2020 年から 2023 年 10 月現在まで継続して確認できたことから、アメリカザリガニを低密度で管理・維持できていることが示唆された。一方で、月別駆除数において 2023 年 8 月に 2022 年の月別個体数を上回ったことから、来年度は春から夏の時期にかけて調査頻度を増やすことが望ましい。また、外部からの確実な侵入経路（池の取水口）等への対策も必要である。

ヒシなどの水草に伴う A 池の富栄養化は深刻な問題であり、ニッポンバラタナゴおよび産卵母貝となるイシガイ科二枚貝の生息に悪影響を及ぼす可能性が考えられる。

B池

2019 年 8 月から 2022 年 7 月の期間において、駆除数および月別 CPUE に変化がみられなかった要因としては、池面積 337m² に対して 2 基のみの設置と、駆除圧が低かったものと考えられる。新たに設置した 3 基は小型のアメリカザリガニの駆除に有効なデータを示しており、駆除数・月別 CPUE が前年の 2022 年と比較して低下したことから、B 池の駆除効果が期待される。